東方弱小録

露木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方弱小録

【Ｎコード】
Ｎ０２０１Ｖ

【作者名】
露木

【あらすじ】
弱さ。それを形に表したかのような小さい者が幻想入り。小さき者は幻想郷でどんな事を学び成長するのか？小さき者は強く生きられるのか？姉と兄の様に幻想郷の住民は、その子を見守る……

森での弱（前書き）

暫くこちらを作ります。
編集なんてしなくてもいいように。

森での弱

「う……あ……」

ここは……どこ？

私の周りを見渡す限り……森？

「分からない……」

私は……さっきまでどうしていたのかな……

どうして……私は何でここにいるの……？

頭……痛いな……

光が上から差し込んでいるから……昼間なのかな……？

どうしてだろう……ここに居るのが怖い……

取り合えず寝てないで起きよう。こんな所に居たら危ない気がする……

「ねぇ――」

「え……？」

突然自分の後ろから、まだ幼さが残る声が聞こえた。

どうしてか、その声に反応ちゃいけない気がしたのに、恐怖がある所為でなのか、助けて欲しいと言う一心で、その声の主に縋る様な思いで後ろを振り向いた。

だけど私は自分の行動を恨んだ。だってその声の主は……フワフワと浮いていたから。

そして私はすぐ逃げなかった事にも後悔する。だって次の言葉で――

「あなたは食べても良い人間？」

――絶望する事になったから。

私はその発言を冗談かと思ったけど、どうしてか冗談と思えなかった。偏見かもしれないけど、その黒い衣服で髪が金色、そこまでは別に許容できる。だけどその少女の周をくるくると回る黒い何か。そしてその少女は浮いている。この二つが私の恐怖心を掻き立てるには十分な材料だった。いや十分すぎた。だって声が出せなくて、足を一歩も動かす事が出来なかったから……

「何も言わないのは、肯定って事でいい？」

私はその言葉ではっとした。肯定？冗談でしょう？だって私はまだ……生きたいのかな……？

自分でもびっくりする答えだった。私は生きる事が疲れているなんて事が、今分かったから。

でも、どうしてか、死ぬと言う事の恐怖がどうしても拭えなかった。

「ははっ……」

「何を笑っているのよ」

だって、この考えに苦笑するしかないでしょう？

生きたくないくせに、死ぬのが怖いなんて。

でも……これって現実なのかな？夢だとしても意識がハッキリしているけどさ……

……死ぬって、どんななのかな……？

「ねぇ……黒い女の子さん……名前は……？」

「何でそんな事教えなくちゃいけないのよ？」

だって、死ぬ前に、私を死なせてくれる方の名前ぐらい……知っておきたいから……

「駄目……かな……？」

「はぁ、変わった奴ね。私はルーミア、宵の妖怪のルーミアよ」

ルーミア。ルーミア……私はその名前を心に刻むように呟いた。

「ねぇ……ルーミアさん」

「さんは別に付けなくて良いんだけど……なによ？」

案外、気さくな人……ううん、妖怪なのかな……？

そんな妖怪さんに死なせて貰えるなんて、私って贅沢だなぁ……

「私の事ね……食べても良いよ」

「人間……よね、あなた」

そんな事言わないでよ、私はただ死にたがりなだけだよ。

「だけど……お願いがあるんだ」

「はぁ、まあ無茶でないなら……」

やっぱりルーミアはいい妖怪さんですね。

こんな私の願いに耳を傾けてくれるだなんて……

「死ぬのが私……怖いんだ。だから食べるのは……私が寝た時でいいかな……？」

「寝た時って……痛覚を感じれば結局は起きちゃうでしょう？」

気持ちの問題なんだ、少し怖くても、暗ければ分からないから……

「駄目……かな？」

「別に構わないけど……どうやって寝たって分かるのよ？」

「そこの木で……私、寝るから……私、寝付きが悪いから、地面にその内横になると思う……」

「寝付きって……」

やっぱり……だめかな……

「はぁ、分かったわよ。けどそんなに早く寝れるの？」

あ……その事、考えてなかった……

「隣に誰かいたら……すぐ寝れると思う……」

安心できる人に限るけど……

「私に隣に居てって事？」

「出来たら……」

私ってやっぱり自己中心的、だよね……

「分かったからそんな顔しない。というか、どうしてこんな事を……」

「ありがとう」

「はぁ……」

ルーミアは私の所まで降りてきて、すぐ傍の木に寄りかかった。

そこに私がぺたりと座り込んだ。

「あったかい……」

「そう？」

うん……とってもあったかい。

私はその後、一分足らずで寝てしまった。

・・・・・・・・・・・・

「ん……」

「はぁ」

私は人間を食べるために来たのに、何でこんな事をしているのよ……？

それにこの人間、私よりも小さいし、人間なら持っている筈の霊力さえないし……

何というか……喋っている間に食べる気が失せる。

もうこの子供は熟睡してるみたいだけど……

「食べる気がもう無いわね……」

もう食べるとかどうでも良かった。

「う……ん……」

少し子供がそわそわしている気がしたので、隣を見たら……

「何で泣いてるのよ……」

涙を数滴流していた。何処が安心なのよ……

私まで眠たくなってきたので、こちら側に引き寄せ、頭を撫でる。

「ん……」

すると、途端に子供は笑顔になった。

「地面に横たわってないから、条件に反してないわね」

そんなことを自分に言い聞かせながら、この子供と寝る事にした。

森出の弱

「あう……？」

私……ここで何していたんだっけ……

そういえばルーミアに食べて貰ったんだっけ……

じゃあここは死後の世界なのかな……

死後の世界でも意識ってあるんだ……めんどくさいな……

死んでも生きていると同じなんだ……いっその事……消える事が出来たら……

「もう一回……」

「何を言ってるのよ」

え……？

すぐ近く……隣から、死ぬ前に聞いた声が聞こえてきた。

私はその声で目を開いた……

「ルー……ミア……？」

「そうだけど……まさか私の名前を忘れかけたなんて言わないでよ？」

あ……れ？どうして……？私の今の体制は、ルーミアに膝枕をされている状態だった。

「まだ寝ぼけてるの？まぁ一日の間ずっと寝ていたものね」

「どう……して？」

私のこの発言に、ルーミアは不思議そうな顔をした。
だって……私を食べてくれるんじゃなかったの……？
私の言おうとしている事が分かったのか、ルーミアは何かを思い出したように、ああ、と。

「私は宵の妖怪、人間の闇を食べるのよ。ごめんなさいね、勘違いさせるような事を言って」

じゃあ……死ぬんじゃなかったんだ……
思わずルーミアの膝に顔を埋めてしまった。

「なによ？まるで死にたかったみたいじゃない」

「そうだよ……私は死にたかった、それが何？悪い？」

楽に死ねない事が分かったため自暴自棄になり、私はルーミアに対して思わず挑発的な態度を取ってしまう。私は言った後に気が付いた。一日の間とルーミアが言ったのを。つまりルーミアが私の傍に付きっ切りで居たという事だから。その相手にこんな発言をしてしまった事に私は悔まずにはいれなかった。
けどルーミアは私を咎める事をせず無言で居た。少し気になってしまい、顔をルーミアの方に向ける。ルーミアは寝ていた。正確には目を瞑っていた。

「ねぇ……」

「なんですか……？」

ルーミアが目を瞑った状態で話しかけてきたため、少し驚きながらも言葉を返す。
ルーミアはそのまま私に話しかけてくる。

「名前……なんて言うの？」

「え……？」

ルーミアの聞いてきた事が一瞬分からなくて、逆に聞き返してしまった。

「名前よ……名前」

「なま……え」

私の名前……？
そういえば私って……誰だっけ……？

私がいつまでも名前を言わないのに不信感を抱いたのか、ルーミアは目を薄く開いて私を見てきた。まるで可哀想な者を見るかのように……

その時、不意に何かが頭で思い浮かんだ。

「水……に……音……？」

「水に音？……スイネ、ミズネ……この辺りだけど」

これが……私の名前なのか分からなかった。
私って……なんなんだろう……

「聞いてる？」

「あ……えっと……どっちか分からない」

「ああもう、水音（スイネ）でいいわね」

ルーミアは適当に決めたようだけど、それで私は良いと思う。

スイネ……私はその名前を小さく、小さく確かめるように何度も言った。

そんな事をしていたら、ルーミアが呆れたような顔をしてきた。

「はぁ……水音はこれからどうするの？」

「これから……？」

またもルーミアは呆れた顔をしてきたので、反抗するように私の頬を膨らませた。

その頬を引っ張られてしまった。

「いひゃい……」

「水音は元の所に戻りたいか――……記憶が無いんだっけ……」

ルーミアはしまったとでも言うかのような顔をするけど、記憶が無いからこそ、そこまで悩む必要は無いと思う。さっきまで私は後ろ向きに考えていたけど、記憶が曖昧な所為か、そこまで気にしなくなってきた。

「一応博霊の所に行けば何か分かるわよね……」

「博霊……？」

その単語が気になりルーミアに思わず聞くようにしてしまう。

「あなたがここに居る原因が居るかもしれない場所ね。リボンをして置かないと……ほら何してるの、行くから立ちなさい」

ルーミアに促され、私はふらつくのをルーミアに支えてもらいながら立つ。

多少葉っぱが服に付いていたので、付いている所を払う。

「じゃあ行くわよ」

「うん……あれ……？」

私はルーミアの方を向いて頷いたけど、思わず首を傾げてしまう。

先程までは私よりも凄く背が高かったルーミアだったのに、今は私と同じ位の背で、金色の髪に、赤いリボンが付いていたから。

私が疑問に思った事が分かったのか、ああ、と言っていますが、特に何も言わず私を置いて進んでいく。

「何してるの？置いていくわよ？」

「あ……今行きます」

私はルーミアの隣について歩いていった。

博霊の弱

「けほっけほっ……」

「水音、体をもう少し鍛えた方が良いわよ？」

ルーミアに思わぬ事を言われてしまった。
逃げる理由としては、私は生まれつき体が弱い。普通の生活をしていれば、もう少しましだったと思うけど、唯一良かったのが、喘息が二年前に直った事。だけど裏を返せばその歳になるまで運動が殆ど出来なかったってことですけどね……

「ここに……博霊さんがいるんですか……？」

「もう少し上よ？」

ルーミアにまたも思わぬ事を言われて、目線を上に上げたら……
そこには唯、石の階段が存在していた。さらに上を見るけど、石の階段しか見えなかった。

「上るの……？」

「いつもなら飛んで行くんだけど、水音は飛べないでしょ？」

そういえばルーミアって飛べるんだっけ……

「おぶってもらっちゃ……」

「頑張りなさい。私も一緒に行くから」

足がもう限界なんだけどな……でもルーミアにこれ以上迷惑掛けたくないから頑張ろう……

「ほら、いくわよ」

ルーミアはいつの間にか、五十段位を上っていた。

「今行きます……」

水音地獄石段突破中……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あんたら本当に何しに来たのよ？」

私の目の前には年増……な
「霊夢？」

訂正、そこそこ年を得た妖怪の八雲紫。
「余り変わってないわよ」

と、その他。
「それはあんまりだぜ！？」
「私だって立派な鬼だよ！？」

「はいはい、騒がないでよめんどくさい」

全く、いつからここは妖怪の溜まり場になったのよ……
「私は人間なんだが……」

「そういえば萃香が酔っていないのは珍しいわね？」
「無視か？無視なのか？」
魔理沙が珍しく落ち込んでいる、異変かしらねぇ……
「私だって四六時中酒を飲んでいる訳じゃないんだけど」
『え？』
「まって、その反応は私としても不本意だよ」
私が見ていた時はいっつも顔を真っ赤にしていたのに。
「というかそんな事はどうでも良いのよ」
萃香が良くないと言っているが、私にとってはどうでも良い事よ。
「あんた達三人の組み合わせの成り行きを知りたいわね」
紫と魔理沙と萃香、この三人の組み合わせが余りに珍しすぎる。
「私は紫に呼ばれただけなんだが？」
「私も紫に呼ばれたから来ただけだよ？」
この二人は紫に呼ばれてきた？普通なら無視しそうだけど。
紫を見ると何故か目を逸らされた。
なんなのよ一体。

「まあこの人選は特に意味は無いのよ」

「だったら何の用よ？まさかまた外来人？」

私は冗談で言ったつもりだったけど、紫は私を驚いた顔で見てきた。

はぁ。最近外来人が多いわね。いや、逃げ切る外来人か。

「男ばかりが来て困るわね。本当に」

「あら、それなら大丈夫よ今度の外来人は……噂をすれば、ね」

紫が見ている方へと顔を向けると、そこには……

「ルーミアか？」

「ルーミア？珍しいわね」

紫ならまだしも、妖怪でここに来るなんて滅多に居ないから珍しく感じるわね。

まあ神社に妖怪がいるのもどうかと思うけど。

「……ほら……頑張りなさい……」

……ルーミアの口調ってもう少し幼かった気がしたんだけど気のせいかしら？

「なあ霊夢、あいつの口調ってもう少し幼かった気がしないか？」

魔理沙も疑問に思ったらしく、私に聞いてきた。

確か口癖が、そーなのかーだったかしら？でも一回しか聞いたことが無いし……

「あなたたち……妖怪をどんだけ見くびってるのよ……」

紫にそんな事を言われたけど、仕方ないじゃない、興味が無いんだから。

「あら？」

ルーミアの方を向いたら、いつの間にかルーミアの隣に……子供？

「あら、どうやら来たみたいだけど……この石段は辛かったわね」

紫が良く分からない事を言ったが、私はすぐに理解する事になった。

何故ならルーミアの隣に居た子供は前に倒れ付したから。

「水音！？」

ルーミアが叫んでいるのは子供の名前かしら？

妖怪に情けを掛けられるなんて、幻想郷は小さくなったわね……

そんな事を思いながら、恐らく貧血にでもなったであろう子供の所へ向かう事にした。

「本当に何も無い、小さくて弱い――ね」

紫は何か言った後に私の後に続いて来たが、途中の言葉は水音と叫ぶ声で聞こえなかった。

容姿の弱（前書き）

今回も短めです。

容姿の弱

「う……ん……？」

食欲がそそられる匂いがしたため目が覚めました……

けど頭が凄く痛いし……今は何か考える事をしたくありません……

「あら、起きたのね？」

え……？　ルーミアではない声が聞こえた方を向いたら、そこには……多分巫女の方が居ました。

何で腋の所は何も無いのか気になりますが……でも……この人誰でしょうか……

そんな私の疑問が巫女様は分かったのでしょうか、私の所まで来てくれました。

「私は博霊霊夢、一応この神社の巫女をやってるわ。貴方は……水音でいいのよね？」

「あ、えっと……はい……」

博霊さんが矢次に話してくるので、私はすぐに対応できずに曖昧な返事をして俯いてしまいました……それに博霊さんは苛々したのか、私に睨むような視線をしている気がしました……

「顔を上げなさい！」

「ふえ……！？」

博霊さんに怒鳴られてしまい、驚いた時の口癖のような物を上げ

てしまいました……
そして恐る恐る顔を上げると……
「……？顔色はまあまあね。ただ単に貧血なだけね？」
私を心配そうな顔をして覗き込んでいました……
次に博霊さんは何を思ったか、私の顔に手を……
「……！」
思わず反射的に私は目を瞑って震えた気がしました……
「……うん？特に熱とかじゃなさそうね？どうかしたの？そんなに震えて……もしかして寒いの？それなら食べやすい物に……」
博霊さんが考え込むようにそっぽをむいて、口元に手を当て始めました……
「あ、その……寒くは無いので大丈夫、です」
私が少しばかり意思を伝えると、博霊さんは考え込むのを止して、他にも具合を聞かれたので、しどろもどろですが、しっかりと伝えました。
「なら大丈夫ね。じゃあ毛布そのまま羽織ったままでいいから来なさい」
「あ、はい……」
ですが私の発言に博霊さんは段々苛付いてきたのか……

「あああもう！あんたは男の子でしょうが！もう少しハッキリ物を言いなさいよ！」

こんなんだったら前からいる外来人のほうがましょ。なんて事を言われてしまいました……

そして博霊さんはさっさと立って行こうとしています……

外来人って何かな……？そんな事を思ったとき、博霊さんの言葉が気になりました……

「あの、博霊さん……」

「だからハッキリ物を言いなさい。それに霊夢で構わないわよ」

「私は……女です……」

私の発言に、一瞬時間が止まった気がしました……ですが霊夢さんは歩くのを止めたままです……そんなに驚く事を言いましたでしょうか……？

数秒後、「霊夢ー！ご飯出来たぞー！子供を連れて来てくれー！」その声で霊夢さ……霊夢ははっとしたように体を動かし、こちらを見てきました……

「お……おん……な？」

「えっと、はい……」

霊夢は何かを確かめるように、息継ぎもしないで、水音が女という言葉を繰り返しています……そんなに私は男っぽく見えるでしょうか……？

私の容姿は……ロングヘアーで、大体髪が地面すれすれまで伸びて……お金を私に使わせて貰えませんでしたし、刃物は私から遠ざけられて居ましたし……

顔は何処にでも居るような普通の女顔ですし……身長は百三十九辺りですし……

服は中にピンクで白のレースが入ったフリフリの……何て言うんだっけ……後灰色のパーカーだけど……そういえばこれ、私のお気に入りの服だ……なんでこれ着てるんだろう……？

「霊夢何やってるんだ？ご飯が冷めるぜ？」

「魔……魔理沙……」

「なんなんだ？まるでお化けが出たような顔をして……お前なら問答無用で退治しそうだけどな。ほら、ご飯が冷めるから早く来て欲しいんだぜ。出ないと……お、水音だったか？お前も霊夢に何か言って欲しいんだぜ」

魔理沙さんの、先程の霊夢の矢次の言葉に私が反応できないで居ると……

「女……の子……」

「霊夢、流石にその台詞は酷いと思うんだが……」

多分その言葉は魔理沙さんに言ったんじゃないと思います……だって霊夢は私を指差していますもの……

「水音が女の子なのよ！」

「それがどうかしたのか？」

魔理沙さんは霊夢さんの言葉を受け流すようにして、早くしてくれ、ご飯が冷めるんだぜ。

そんな事を静かに言った。

けど次の瞬間……

「女ーー！？」

物凄く不本意な事を言われました……

だから自然と……

「……ふえええぇぇぇ……」

そんな言葉を言いながら泣いてしまいました……

その後、二人に土下座される勢いで謝られたのは言うまでも無い余談です……

思考の弱

「ぐすっ……えぐっ……」

「あのーそのー……取り合えず食卓に行ってご飯を食べようぜ」

「そっそうね……」

私は今っ……霊夢達に気を使わせてしまって……

「ひっく……ぐすっ……」

凄く重い空気の中にっ……います……

そこに、トタトタと、誰かがこちらに向かってくる音が。

「おーい霊夢ー子供を連れて来ないから食事出来ないんだけど……」

そこには私と同じ背の、頭に二本の……角を生やした女の子が。

同い年ぐらいかなぁ……

「なに私から目を逸らしてるのさ、というか何で子供は泣いているんだい？」

「ひっく……」

私の顔を覗きながら、女の子はそんな事をいいました。小さい方なのに良く周りを見ていると思わずには居れない位の洞察力です……

そして何を思ったのか、その女の子は何処からか布切れを取り出

し……

「ほら泣かない泣かない、そんな顔をしてると折角の可愛い顔が台無しだよ」

私の目元を拭ってくれました。そして可愛い顔とも言ってくれて……

「私……可愛いですか……？男の子に見えませんか……？」

そんな事を言ったら、女の子は不思議そう……不意を付かれたような顔をしました……

「何言ってんだい？あんたは立派な女さ、自身持ちな。そんな可愛い容姿を持ってるんだから」

そんな事を笑いながら言ってくれました。

「は……い……！」

「ほら、私はこの二人に話があるから先に食卓にいってな。このまま真っ直ぐ行けば分かるから」

その言葉の通り私は真っ直ぐ進もうとして……立ち止まりました。その行動に女の方は首を傾げました。

「ん？どうかしたかい？」

「あ、あの……！なっな……！」

私のつっかえつっかえの言葉を待つように、促したりせず私を見てくれています。

「名前……！教えてくださいませんか……！」

「ああ、名前ね、私は鬼の伊吹萃香。聞いたんだからちゃんと憶えてよ？」

「はっはい！萃香さん！」

私は珍しくハッキリ言葉を言えていました。萃香さん……この二文字で暗示をかけたように。

「さんは別に要らないよ。ほらいきな」

そう促され、私はぺこりとお辞儀をして走っていきました。

多分……顔を真っ赤にして。

・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今時珍しいくらいの恥ずかしがりやだったねぇ……いずれ杯を交わりたいもんだね。
さて、こっち側を今は何とかしないとねぇ。

「さて二人とも覚悟はいいかい？」

私の言葉に珍しく霊夢まで震えている。
全く、霧雨ならまだしも……いや、殺意を無意識に出していたみたいだね。

「出来れば穏便にして欲しいんだぜ……」

「同感ね……」

「あの娘を男だと勘違いしておいてそれはないだろう？」

私が少しばかり怒っているのはその事だ。
今やこの幻想郷では男は……いやそれは良い。
重要なのはどう見ても女にしか見えない奴を男と間違えたことだけ。

食卓に居た時、珍しく紫でさえその事に怒っていたからね。

この二人にはお経を据えてあげないと。

「お手柔らかにして欲しいわね……」

「私もだ……」

「冗談♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「……ァァァァ……！」

「ふえ……？」

何処からか、いいえ、私が来た方から何か聞こえた気が……
気のせいかなぁ？

「あ、来たわね？」

ふえ？またそんな事を言ってしまいました……そして声の聞こえた方を向くとそこには、西洋の服を着た、まるでお人形さんみたいな女性が居ました。だから私は思わず……

「綺麗……」

「へ？」

お人形さんみたいな女性……いえ！お人形さんは私の言った事が分からなかったようで、首を傾げました、次には煌びやかな扇子で顔を隠してしまいました……

「まさかそんな事を言われるなんて思って無かったわ……」

「お人形さん？」

私はまた、そんな言葉を不意に言ってしまいました……でも間違っていません！

「えっとー……私の事かしら？」

「それ以外にいませんよ？」

私の発言に、お人形さんは困ったような微笑を私に向けてきました。

やっぱりお人形さんです……

「私はお人形さんじゃないわ、八雲紫、気軽に紫って呼んでいいわ」

「わあ……素敵な名前です……紫……さん？」

「さんは別に要らないわ、それとありがとうかしらね？」

皆さんが付けないで良いなんて……フリーな人たちです……

そんな事を思いながら、どうしてありがとうなのでしょうか……？

そんな風に紫さんとお話しながら、ボロボロな霊夢と魔理沙さんが帰って来るのを待って、食事の仕度を紫さんとしました。

体調の弱

「あ、う……紫……その、これは……恥ずかしいです……」

「ほら、下を向いてると落とすわよ？」

「お茶は美味しいわ」

「そうだな」

「嫌々……なに水音をスルーしてるのさ」

私は……今紫に箸を取られて……

「しっかり噛んで食べなさい？」

「はむうぅぅ……」

紫に食べさして貰っています……あうぅ……

別に私一人でも食べれますよぉ……

「ん～そういえば後少しよね」

「そういえば後一週間か？」

「その前に水音を助けようよ……」

「霊夢～魔理沙さん～はむぅ……」

お願いですから助けてぇ～この状態は恥ずかしいです……
顔が熱くて仕方ありませんです……
何で萃香は自分で助けないのか？ですか～？
わからないけど紫が何かしたそうです……
紫に直前で目隠しされてしまったので何も見えませんでした……
紫が「自主規制よ……」といってました……

「仕方ないわねぇ……」

「なんで私はさん付けなんだ……？」

「ふえええぇぇ……はむぅぅ……」

ご飯は美味しいけど恥ずかしいのは嫌です～……

「ほら紫、いい加減離して上げなさい」

「嫌よ」

ふえええぇ……私を挟んで睨み合わないで下さい……

「はぁ……仕方ないわねぇ、はい」

ふえ？急に浮遊感が訪れて……
私はすぐさまキュッと目を瞑りました。

「っと……！？危ない事するわね、目を瞑ったから良い物の……
隙間の中はトラウマ物じゃなかったかしら？」

「その子はすぐに目を瞑るから大丈夫よ」

「というか水音って軽いわね？体重幾つよ？」

「あう……言いたくないです……」

だって……軽すぎるのです……余計な心配掛けられそうです……

「言いたくないって……そんなに軽いのか？」

「普通逆じゃないかい？」

「あの、その……」

あうぅ……言って大丈夫なのかなぁ……前言った時には叱られたんだけど……

「ほら言って御覧なさいよ」

「えっと……その、……五……です」

はぅ……思わず小さくなってしまいました……

でも紫は蒼白な顔をしてるから聞こえたのかな……

だから確認のように紫が聞いてきました……

「水音？もう一度、言ってくれるかしら……？」

「十八．五です……」

私がハッキリとこれをいったためです……

皆蒼白な顔になってしまいました……

私は必要最低限の食事しかしていなかった筈なので……
それに私の体は太りにくい体質らしいので……
「冗談……よね？水音……貴女一体何歳なの……？」
「多分……八歳位……です」
私って誕生日とか祝ってもらえなかったみたいなので……多分八歳なんです。
私の歳を聞いたから皆更に蒼白な顔になってしまいました……
『や……』
「や……？」
皆が口を揃えて何かを言おうとしているみたいですが……分かりません……
や……なんですか……？
そしてそれを代理するかのように霊夢が口を開いて……
「痩せ過ぎよ！もっと食べなさい！というかここにあるものを嫌でも食べさせるわ！」
「ふえ？」
そう言うと霊夢は私を膝に乗せて……
「ほら唐揚げ、ハンバーグ、ウインナー、全部食べさせるわ！」
「お腹一杯……」

ですが私の言葉は届かず……

「問答無用！」

届いてますが、心に響かず。

「もぐぅぅ……！」

……………………………
・・・・・

その後、紫にストップを掛けられるまで食べさせられました。

私は追記しておきます。

食べ過ぎるとお腹を壊して逆に痩せます。

現体重……十七ポッキリ。

体調の弱（後書き）

短いから次の話は多めに書きます～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0201v/

東方弱小録

2011年10月7日02時33分発行